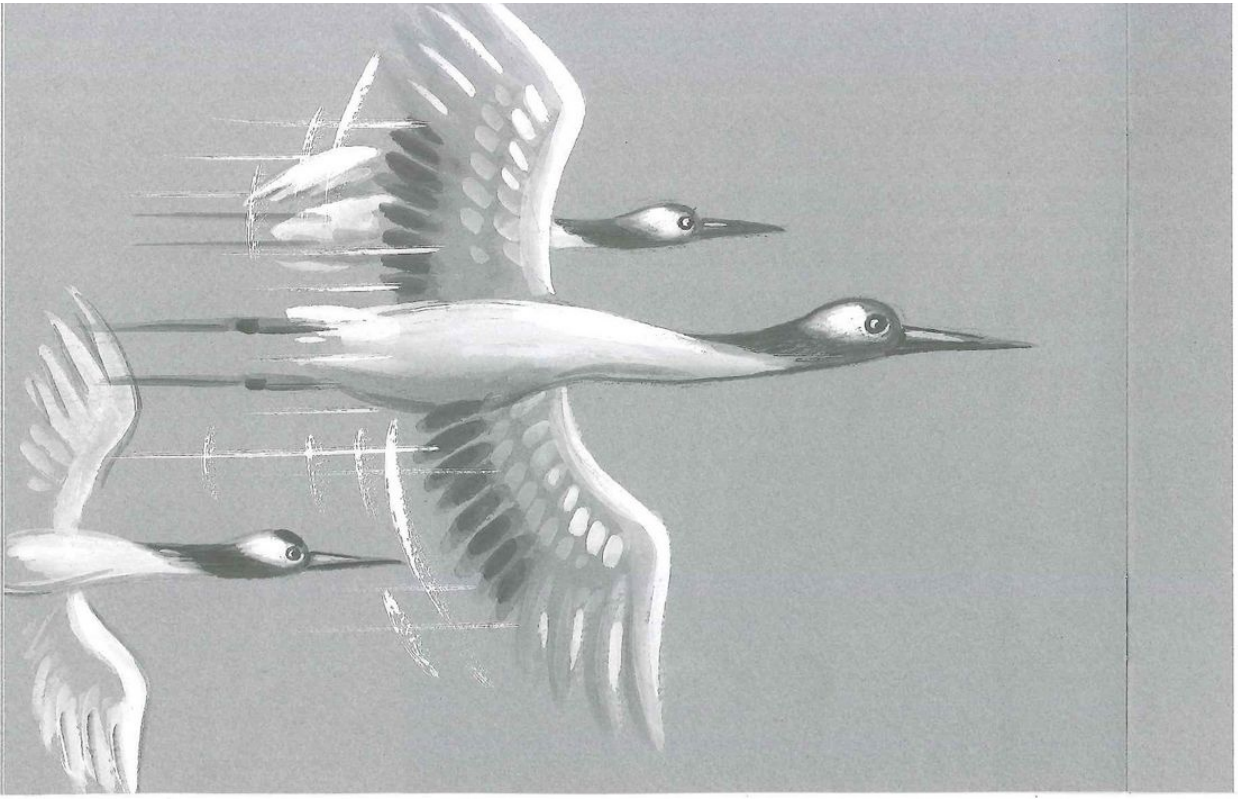

「もう、あとひといきだ。みんな、がんばれよ」
百羽のツルは、目を、キロキロと光らせながら、つかれたはねに、
ちからをこめて、しびれるほどつめたい、夜の空気をたたきました。
それで、とびかたは、いままでよりも、すこしだけ、はやくなりました。
もう、あとが、しれているからです。
のこりのちからを、だしきって、
ちょっとでもはやく、みずうみへつきたいのでした。